

轡 (2) 遺跡

—県営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う遺跡発掘調査報告—

1997年3月

青森県教育委員会

序

青森県教育委員会は、県営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（轡地区）に伴い、建設予定地内に所在する弘前市轡(2)遺跡の記録保存を図るため、平成7年度に発掘調査を実施しました。

今回の調査により、主に縄文時代の遺物が発見されました。

本報告書は、この発掘調査の成果をまとめたものであり、いささかでも今後の文化財の保護及び活用に資するところがあれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査の実施と報告書の作成にあたり関係各位から御協力、御指導を賜りましたことに対して、心から感謝の意を表します。

平成9年3月

青森県教育委員会

教育長 松 森 永 祐

例 言

- 1 本報告書は、平成7年度に発掘調査を実施した弘前市に所在する轡(2)遺跡の調査報告書である。
- 2 本遺跡は、平成4年3月に青森県教育委員会が編集発行した『青森県遺跡地図』に遺跡番号02188として登録されている。
- 3 執筆者の氏名は、依頼原稿については文頭に記載し、その他は文末に記してある。
- 4 資料の分析、鑑定については、下記の方に依頼した(敬称略)。

遺跡周辺の地形と地質	青森県立板柳高等学校教諭	山口 義伸
石器の石質鑑定	青森県立板柳高等学校教諭	山口 義伸
- 5 本書に掲載した地形図(遺跡の位置、周辺の遺跡)は、建設省国土地理院発行の2万5千分の1及び5万分の1の地形図を複写したものである。
- 6 挿図の縮尺は、図ごとにスケールを付した。なお、遺物写真の縮尺は、不統一である。
- 7 基本層序・遺物の文・図中での表現は、原則として次の様式・基準によった。
 - (1) 基本層序の堆積土の注記は、『新版標準土色帖』(小山正忠、竹原秀雄 1993)を用いた。
 - (2) 図中で使用したスクリーン・トーンの表示については各図中に示した。
- 8 文中に引用した文献については、著者名・編集機関と西暦年で示した。
- 9 発掘調査における出土遺物・実測図・写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 10 発掘調査及び本報告書の作成にあたり、次の方々から御教示、御指導をいただいた(順不同、敬称略)。

岡田 郁雄、北林 八洲晴、新岡 巖、鈴木 徹、遠藤 正夫

目 次

序	
例 言	
目 次	
第1章 発掘調査の概要	1
1 調査要項	1
2 調査の方法	3
3 調査の経過	4
第2章 周辺の遺跡と地質	6
1 周辺の遺跡	6
2 遺跡周辺の地形及び地質	9
第3章 出土遺物	14
1 土 器	14
2 石 器	15
第4章 まとめ	17
写真図版	19
報告書抄録	22
奥 付	

図版目次

図1 遺跡の位置	2
図2 調査範囲	5
図3 周辺の遺跡	7
図4 岩木山北東麓の等高線図	10
図5 岩木山北東麓の地形分類図	10
図6 遺跡内及び周辺の火山灰層等の模式柱状図	13
図7 基本層序	13
図8 出土土器	14
図9 出土石器	15
表1 周辺の遺跡	8
表2 土器観察表	16
表3 石器計測表	16

第1章 発掘調査の概要

1 調査要項

(1) 調査目的

県営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（轡地区）の実施に先立ち、当該地区に所在する弘前市轡(2)遺跡の発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財活用に資する。

(2) 発掘調査期間 平成7年10月11日から同年10月24日まで

(3) 遺跡名及び所在地 ^{くつわ}轡(2)遺跡（県遺跡番号 02188）
青森県弘前市大字十面沢字轡47-2、外

(4) 発掘調査面積 1,000平方メートル

(5) 調査委託者 青森県農林部

(6) 調査受託者 青森県教育委員会

(7) 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター

(8) 調査協力機関 弘前市教育委員会、中南教育事務所

(9) 調査参加者

調査指導員	村 越 潔	青森大学教授（考古学）
調査協力員	佐 藤 圭一郎	弘前市教育委員会教育長
調 査 員	市 川 金 丸	青森県考古学会会長（考古学）
	高 島 成 侑	八戸工業大学教授（建築史）
	佐 藤 仁	弘前市文化財審議委員（歴史学）
	山 口 義 伸	青森県立板柳高等学校教諭（地質学）
	赤 平 智 尚	青森県立柏木農業高等学校教諭（考古学）
調査担当者	青森県埋蔵文化財調査センター	
	調査第四課 課 長	大湯 卓二
	主 査	下山 信昭（現、今別町立大川平小学校教諭）
	主 事	山内 実

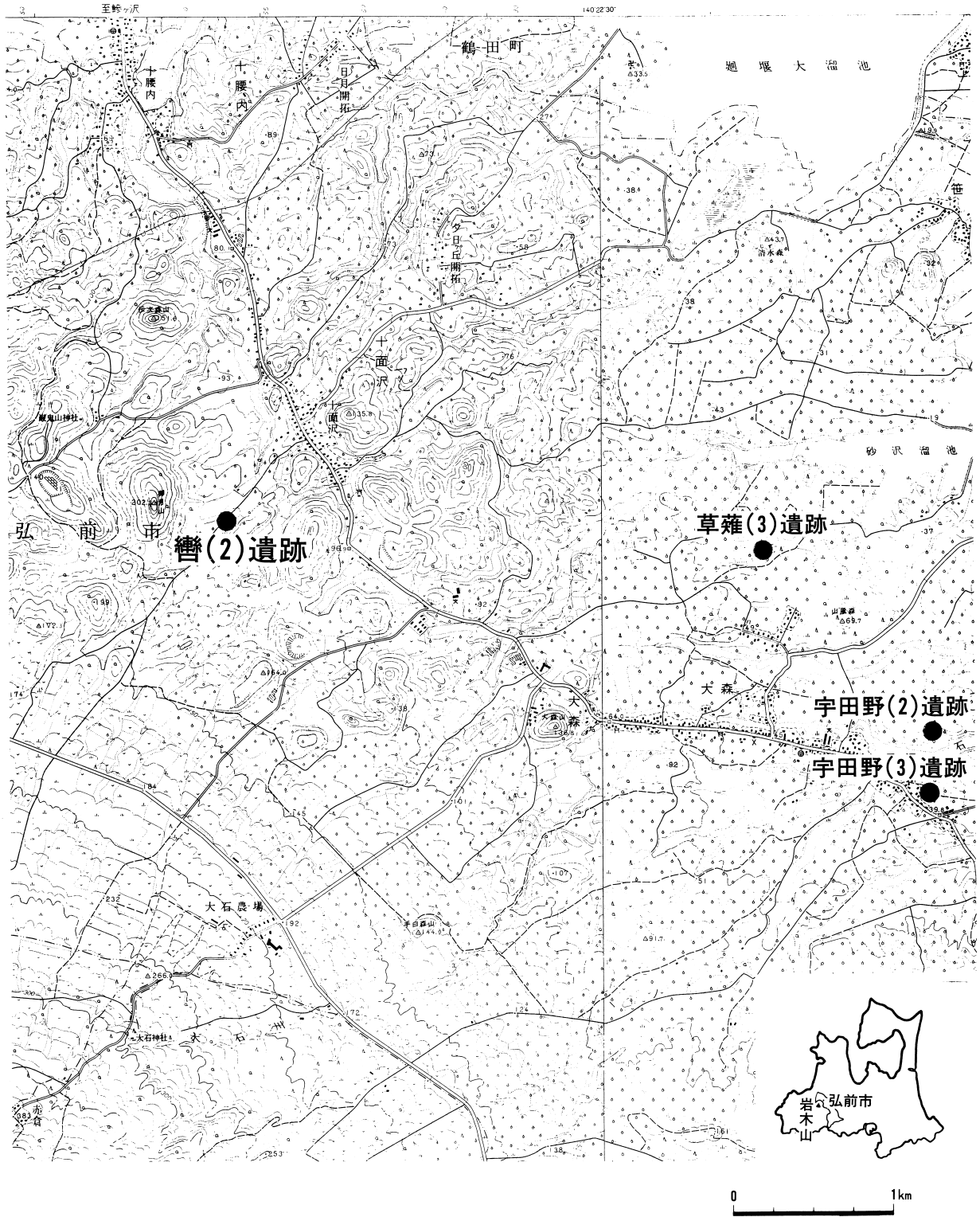


図1 遺跡の位置

2 調査の方法

調査開始にあたって、道路建設用の中心杭No.34を基準点とし、中心杭No.34とNo.35を結ぶ基準線をRラインとした。中心杭No.34でRラインに直交する基準線を20ラインとして4m四方のグリッドを設定した。各グリッド杭の呼称は、中心杭No.34（R-20）を基点として、南東へQ, P, O……の順に、北西へS, T, U……の順にアルファベット文字を付すこととした。また、南西へ21, 22, 23, ……の順に算用数字を付して、アルファベットと算用数字との組み合わせで示した。具体的には、そのグリッドの北東隅の基準杭の表示によるものとした。なお、グリッドのアルファベットラインの基準線は、磁北から43度東へ傾いている。

測量原点（ベンチマーク）は、遺跡近くにある道路工事用の仮ベンチマーク（103.393m）からレベル移動を行い、調査区域内に数箇所を設定した。

調査にあたっては、遺跡の土層の堆積状況を観察するために適宜セクションベルトを設け、グリッドごとに掘り進めていった。

遺物の取り上げは、グリッド単位に層位ごとに行うこととした。

土層の名称は、基本層序については表土から下位にローマ数字を、遺構内堆積土については上位から下位に算用数字を各々付すことにした。土層観察にあたっては『標準土色帖』を用い注記した。

写真撮影は、適宜行うこととし、カラーリバーサルとモノクロームの2種類のフィルムを使用することにした。

（下山 信昭）

3 調査の経過

平成7年10月11日(水)、調査器材を搬入し、轡(2)遺跡の発掘調査を開始した。調査は、道路建設用のセンター杭の2本を基準とした中心軸線を設定し、グリッドの設定から始めた。これと併行して調査区内の上物の撤去を行った。

グリッドの設定後、粗掘りを開始した。また、土層観察用にO-53及びP-42グリッドの2ヶ所を約1.5m深掘りした。

しかし、調査区全体が農地造成時の削平により、遺構が検出されず、遺物の出土もきわめて少なかったため、10月20日(金)には、調査終了の目途が立った。

10月24日、調査器材を当センターへ搬出し、本遺跡の調査を無事終了した。

(山内 実)

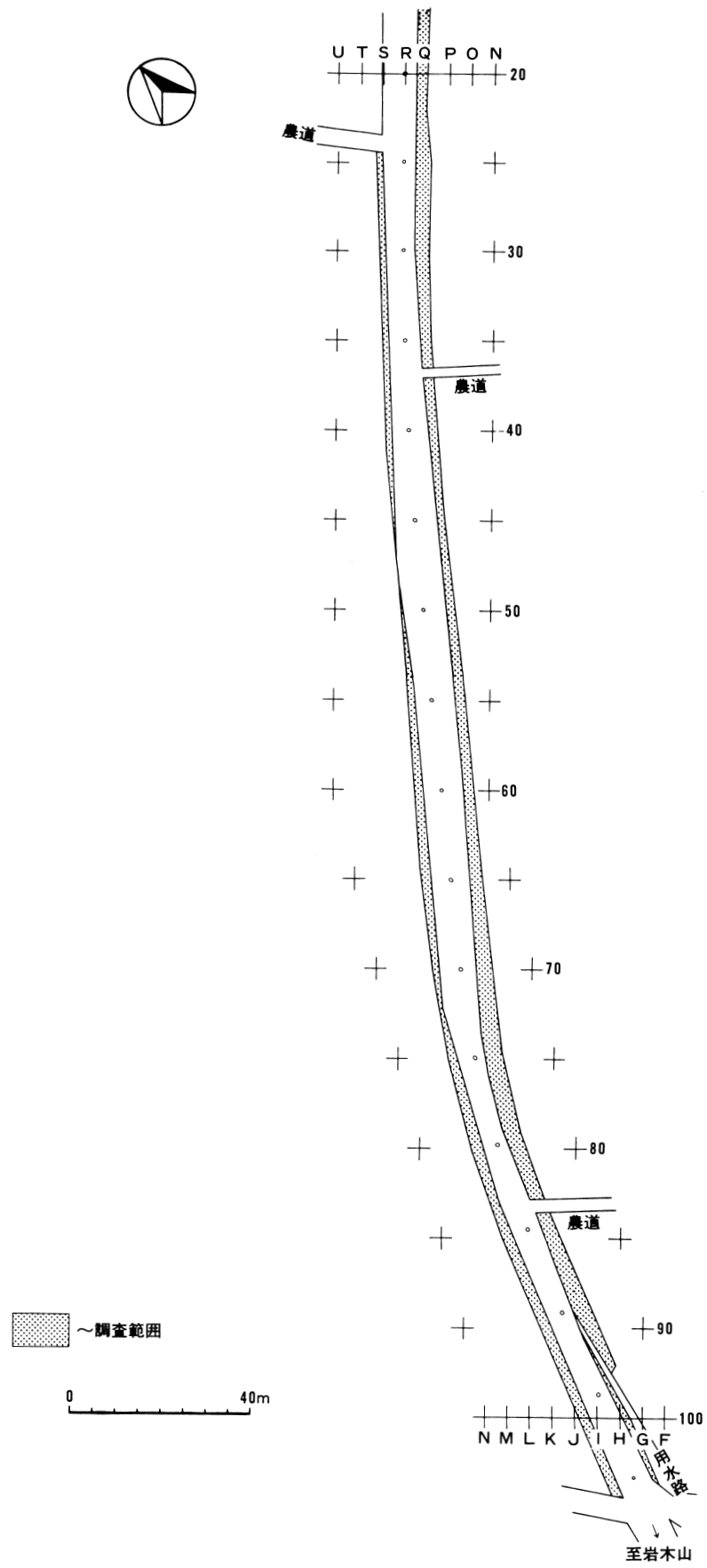


図2 調査範囲

第2章 周辺の遺跡と地質

1 周辺の遺跡

本遺跡は岩木山北東麓に位置し、小戸六溜池に注ぐ浸食谷沿いに位置している。

周囲には、多数の遺跡が確認されている。遺跡の時代は、旧石器時代から中世以降に至るまでの各時代にわたっているが、その概要は、図3と表1の如くである。

また、これらの中で、考古学的な調査が行われ、報告書として刊行されているものは、「岩木山」(弘前市教育委員会 1968)、「砂沢遺跡発掘調査報告書」(弘前市教育委員会 1992)、「弘前の文化財－砂沢遺跡－」(弘前の文化財シリーズNo.15 弘前市教育委員会 1992)、「大森勝山遺跡の環状列石」(村越 潔 北奥古代文化第3号 1971)、「大森勝山遺跡」(村越 潔 日本の旧石器文化第2号 1975)、「弘前市砂沢遺跡出土の土版」(岡田康博 考古風土記第6巻 1982)、「弘前市清水森西遺跡出土の続縄文土器」(工藤国雄 考古風土記第3巻 1978)、「大平(5)・草薙(1)・湯ヶ森(2)遺跡」(青森県教育委員会発掘調査報告書第199集 1996)などである。

なお、本遺跡は、昭和63年度の県教育委員会(教育庁文化課)による遺跡分布調査により新規に登録された遺跡である。当時、この轡地区(弘前市大字十面沢字轡)は、(1)～(8)遺跡が登録されたが、現在は、轡(2)遺跡まで追加登録されている。

(山内 実)

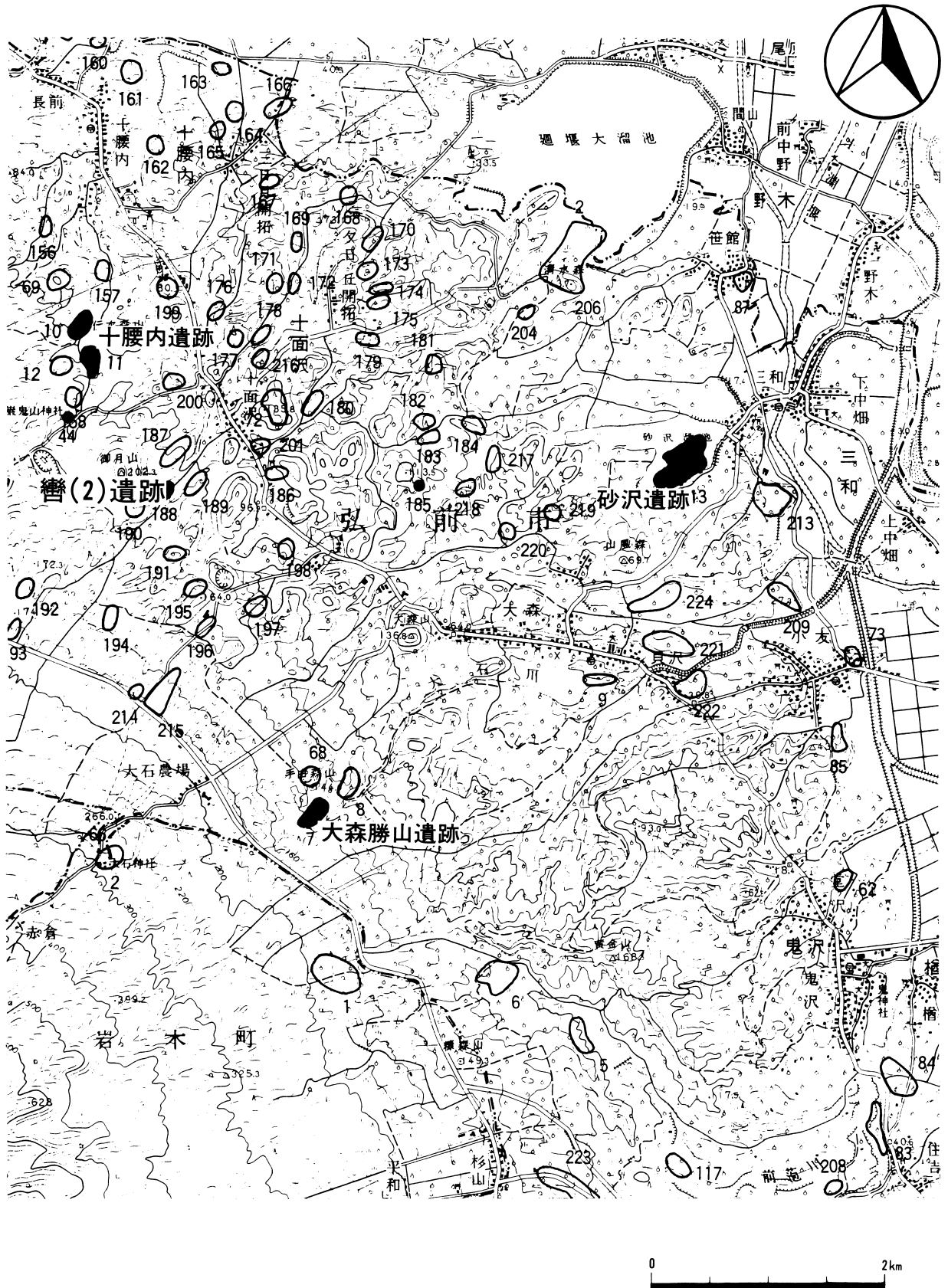


図3 周辺の遺跡

番号	遺跡名	所在地	時代
1	湯の沢遺跡	岩木町百沢字岩木山	縄文(前, 後), 弥生
2	大石神社遺跡	岩木町百沢字岩木山	縄文
5	尾上山(1)遺跡	弘前市高杉字尾上山	縄文
6	黄金山遺跡	弘前市鬼沢字黄金山	縄文(前, 後)
7	大森勝山遺跡	弘前市大森字勝山	旧石器 縄文(前, 後, 晩)
8	裸森遺跡	弘前市大森字勝山	縄文
9	大森中沼遺跡	弘前市大森字勝山	縄文
10	十腰内(1)遺跡	弘前市十腰内字猿沢	縄文
11	十腰内(2)遺跡	弘前市十腰内字猿沢	縄文(後, 晩)
12	蔵鬼山神社元宮遺跡	弘前市十腰内字猿沢	縄文(中, 後), 平安
13	砂沢遺跡	弘前市三和字下池神	縄文(晩), 弥生
66	大石神社遺跡	弘前市大森字勝山	縄文(晩)
69	甕子山遺跡	弘前市十腰内字甕子山	縄文(晩)
72	常夜森遺跡	弘前市十面沢字大面	縄文(晩)
117	鬼沢猿沢遺跡	弘前市鬼沢字猿沢	縄文, 平安
156	猿沢(39)遺跡	弘前市十腰内字猿沢	縄文(後, 晩)
157	猿沢(40)遺跡	弘前市十腰内字猿沢	縄文(後)
158	猿沢(41)遺跡	弘前市十腰内字猿沢	縄文(後)
160	野中(2)遺跡	弘前市十腰内字野中	縄文(前)
161	野中(3)遺跡	弘前市十腰内字野中	縄文(早)
162	野中(4)遺跡	弘前市十腰内字野中	縄文(後, 晩)
163	野中(5)遺跡	弘前市十腰内字野中	平安
164	野中(6)遺跡	弘前市十腰内字野中	縄文(後, 晩)
165	野中(7)遺跡	弘前市十腰内字野中	縄文(後, 晩)
166	野中(8)遺跡	弘前市十腰内字野中	縄文(後)
167	野中(9)遺跡	弘前市十腰内字野中	縄文
168	狐森(1)遺跡	弘前市十腰内字野中	縄文(後)
169	狐森(2)遺跡	弘前市十腰内字野中	平安
170	狐森(3)遺跡	弘前市十腰内字野中	縄文(中, 後)
171	森田(1)遺跡	弘前市十面沢字森田	縄文(後)
172	森田(2)遺跡	弘前市十面沢字森田	縄文(前)
173	浜妻ノ神(1)遺跡	弘前市十面沢字浜妻ノ神	縄文(前)
174	浜妻ノ神(2)遺跡	弘前市十面沢字浜妻ノ神	縄文(後, 晩)
175	浜妻ノ神(3)遺跡	弘前市十面沢字浜妻ノ神	縄文(後)
176	森田(3)遺跡	弘前市十面沢字森田	平安
177	森田(4)遺跡	弘前市十面沢字森田	縄文(前)
178	森田(5)遺跡	弘前市十面沢字森田	縄文(晩)

番号	遺跡名	所在地	時代
179	浜妻ノ神(4)遺跡	弘前市十面沢字浜妻ノ神	縄文(後, 晩)
180	大面遺跡	弘前市十面沢字大面	縄文(晩)
181	湯ヶ森(1)遺跡	弘前市十面沢字湯ヶ森	平安
182	湯ヶ森(2)遺跡	弘前市十面沢字湯ヶ森	縄文(後, 晩)
183	湯ヶ森(3)遺跡	弘前市十面沢字湯ヶ森	縄文(後)
184	湯ヶ森(4)遺跡	弘前市十面沢字湯ヶ森	縄文(前, 後)
185	湯ヶ森(5)遺跡	弘前市十面沢字湯ヶ森	縄文(後, 晩)
186	十面沢田(1)遺跡	弘前市十面沢字田	縄文(前, 後)
187	轡(1)遺跡	弘前市十面沢字轡	縄文(晩)
188	轡(2)遺跡	弘前市十面沢字轡	縄文(晩)
189	轡(3)遺跡	弘前市十面沢字轡	縄文(晩)
190	轡(4)遺跡	弘前市十面沢字轡	縄文(中, 後, 晩), 平安
191	轡(5)遺跡	弘前市十面沢字轡	縄文(後, 晩)
192	轡(6)遺跡	弘前市十面沢字轡	縄文(晩)
193	轡(7)遺跡	弘前市十面沢字轡	縄文(後)
194	轡(8)遺跡	弘前市十面沢字轡	縄文(後)
195	勝山(1)遺跡	弘前市十面沢字轡	縄文(後)
196	勝山(2)遺跡	弘前市大森字勝山	弥生
197	轡(9)遺跡	弘前市十面沢字轡	縄文(前)
198	轡(10)遺跡	弘前市十面沢字轡	縄文(前, 後)
199	赤坂遺跡	弘前市十面沢字赤坂	縄文(前)
200	轡(11)遺跡	弘前市十面沢字轡	縄文(後, 晩)
201	十面沢田(2)遺跡	弘前市十面沢字田	縄文(晩)
204	清水森西遺跡	弘前市十面沢字清水森	縄文, 弥生, 平安
206	清水森遺跡	弘前市十面沢字清水森	縄文
214	轡(12)遺跡	弘前市十面沢字轡	縄文
215	勝山(3)遺跡	弘前市大森字勝山	縄文
216	森田(6)遺跡	弘前市十面沢字森田	縄文
217	草薙(1)遺跡	弘前市大森字草薙	縄文
218	草薙(2)遺跡	弘前市大森字草薙	縄文, 平安
219	草薙(3)遺跡	弘前市大森字草薙	縄文
220	草薙(4)遺跡	弘前市大森字草薙	縄文
221	宇田野(2)遺跡	弘前市小友字宇田野	縄文, 平安
222	宇田野(3)遺跡	弘前市小友字宇田野	縄文
223	尾上山(5)遺跡	弘前市高杉字尾上山	縄文, 平安
224	萩原遺跡	弘前市小友字萩原	縄文

表 1 周辺の遺跡

2 遺跡周辺の地形及び地質

青森県立板柳高等学校教諭 山口 義 伸

轡(2)遺跡は岩木山北東麓の十面沢にあって、十面沢円頂丘群の中を蛇行しながら北流し台地縁辺部に築造された小戸六溜池に注ぐ浸食谷沿いに立地する。

この付近の主な水系としては鳴沢川、長前川、大石川などがある。北麓の鳴沢川はその最上流部が岩木山の放射谷である大鳴沢となり外輪山にあたる岩鬼山に源を発する。流域には標高600m付近を扇頂部とする古期の山麓扇状地が展開し、勾配は約100/1000とかなり急である。鳴沢川は古期扇状地面のほぼ中央部を北流し、また扇状地内に谷頭をもつ支流の湯舟川は鳴沢川西方を同じく北流し平野部側の鱒ヶ沢町湯舟付近で合流する。東麓寄りの大石川は標高1,300~1,400m付近に展開する爆裂火口跡に源を発する赤倉沢に連続する。大鳴沢流域と同様に、流域には標高400~500m付近を扇頂部とする古期扇状地が展開する。長前川は山頂北側に位置する扇ノ金目山に源を発し、下流部に築造された小戸六溜池に注ぐ。なお、長前川は大鳴沢流域及び東方の赤倉沢流域に展開する古期扇状地の接合部付近を流れる。この他、山麓扇状地内を流れる数多くの浸食谷があり、台地縁辺に築造された小戸六溜池・廻堰大溜池・砂沢溜池などへ注ぐ(図5)。

岩木山北東麓の十面沢及び十腰内付近は岩木火山の噴火史を知る上で特徴的な地形を有する。一つは標高140~150m以下の丘陵地内に伝次森山・御月山など直径500m以下の円錐形をなす小丘が点在することである。図5に示したように、主に大石川と長前川の谷間丘陵地にあって、「十面沢円頂丘群」と呼ばれる小丘群は輝石安山岩質の火砕岩及び溶岩からなり「十腰内石」として採石されている。おそらくは現岩木火山の噴火活動以前の、言わば先岩木火山の一連の活動と考えられる(鈴木, 1972)。ただ、これらの小丘群は赤倉沢から流出した泥流堆積物によって形成された泥流丘群とする見解もある(一色・大沢, 1967)。もう一つは、この付近には水蒸気爆発により古岩木火山の山体崩壊で供給された岩屑なだれ堆積物が広く堆積することである。図6に示したように、この堆積物は安山岩質の岩塊及び亜角礫~亜円礫(一部は風化する)を多量に取り込んだ塊状の粘土質(砂質)凝灰岩であって、十面沢円頂丘群の裾野部分を被覆した標高140~150m以下の起伏に富む谷間丘陵地を構成する。なお、一部は中位段丘相当の山田野段丘上になだらかな小丘状の分布をなす。この丘陵地をなす岩屑なだれ堆積物は、湯ヶ森(2)遺跡の稜線部付近、湯舟遺跡付近の丘陵地(標高88.0m)及び長平北方の和開(標高190m)などで中部火山灰層に直接覆われ、また夕日ヶ丘開拓では基盤の山田野層に不整合に厚さ数~10mに及ぶ岩屑雪崩堆積物が載るのを確認している。中位火山灰層は上半部が褐色粘土質ロームからなりローム直下には洞爺火山灰に比定される白色細粒軽石層が堆積する。下半部は黄褐色ラピリ質軽石と暗緑灰色ロームの互層が3~4枚のセットとなって堆積する。岩屑なだれ堆積物からなる谷間丘陵地周縁の平野部側には山田野段丘が発達し洞爺火山灰をのせる中部火山灰層上半部に覆われる。

次に、岩木山南麓から大石川以南の東麓にかけては杉沢森・高長根山・黄金山などを連ねた弧状の火山性丘陵地が展開する。この丘陵地は基盤岩を覆う古岩木火山の火山噴出物によって構成される。火山体側の相対的な沈下によって形成され、火山体側の扇状地面から60~80m程の比高を有し断層崖

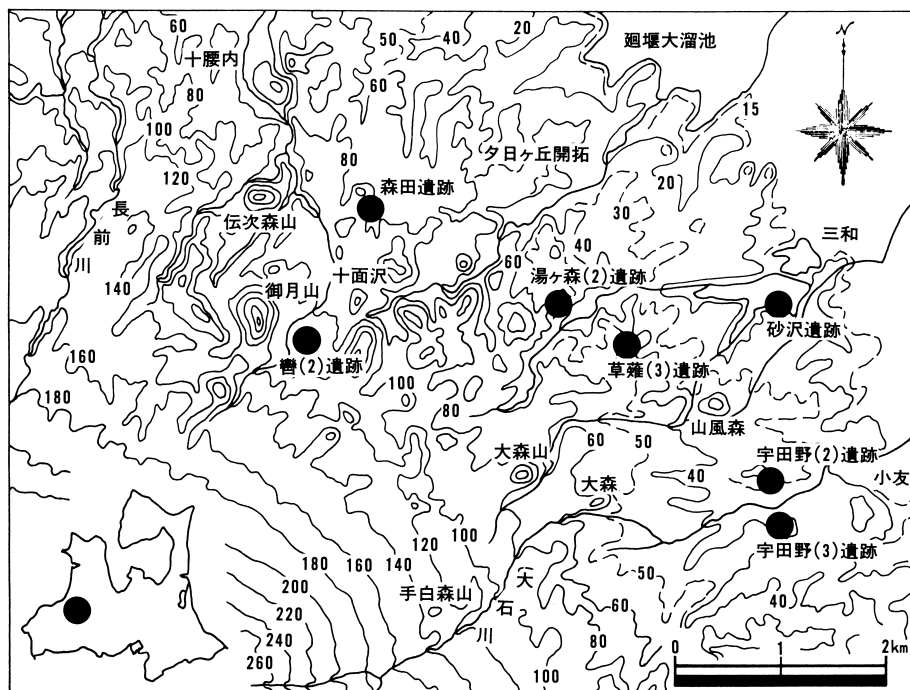


図4 岩木山北東麓の等高線図

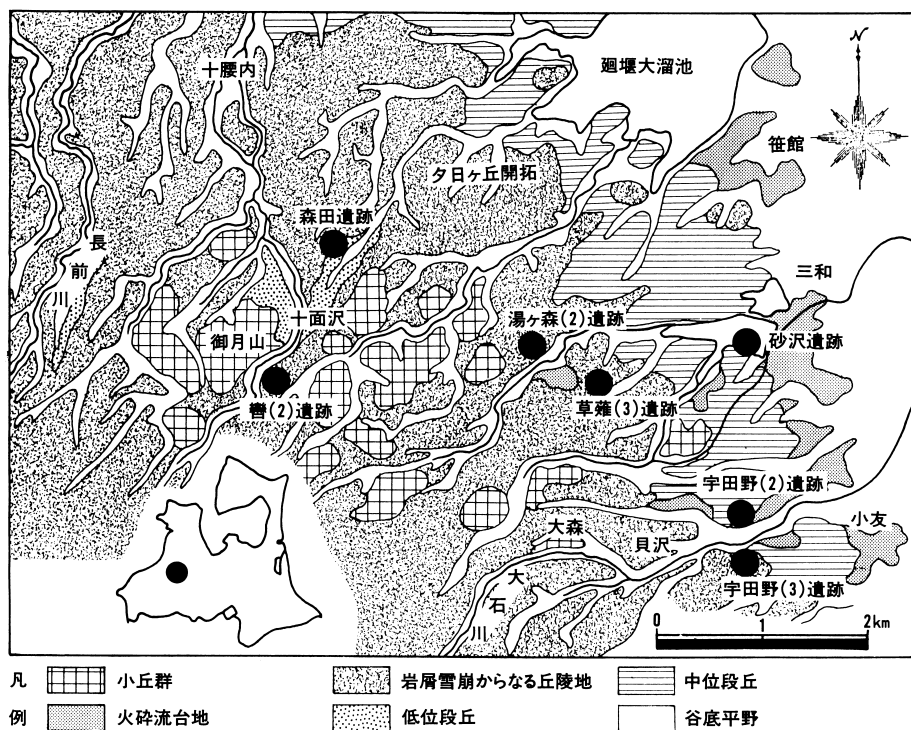


図5 岩木山北東麓の地形分類図

が認められる(鈴木, 1972)。十面沢及び十腰内付近にはこのような弧状の丘陵地は認められない。しかし、標高140~150m付近を境に火山体側には古期扇状地が展開し、その外側には上述した岩屑なだれ堆積物からなる丘陵地が分布する。このことから判断して、丘陵地内側には南麓から延びる環状断層が存在するものと思われる。

ところで、岩木火山麓の南麓から東麓にかけては少なくとも新旧2枚の山麓扇状地が展開し、主に弧状丘陵地の火山体側に分布する。上述のように、古期の山麓扇状地は標高500~600m付近を扇頂部とし、標高140~150m付近を扇端部とする円弧状の地形的な配置をなす。なお、古期の山麓扇状地の一部は北麓の湯舟川西岸に位置する鯉ヶ沢町長平・和開付近と鳴沢川~鍋川間の大平野付近にもあって丘陵地内を流れる鳴沢川流域沿いに分布する。鳴沢川の浸食により環状断層を乗り越えて丘陵地へと舌状に張り出したものと思われる。丘陵地内の分布は山麓部と違ってきわめて平坦であって、現在扇状地面は水田として土地利用され面内に谷頭をもつ小谷を堰き止めた灌漑用の溜池が数多く見られる。一方、新期の山麓扇状地は古期扇状地を浸食する放射谷流域や岩屑なだれ堆積物からなる丘陵地を浸食する小谷に小規模に発達する。新期扇状地及び後述の火砕流台地は上部火山灰層を載せている。なお、大石川流域及び砂沢溜池に注ぐ小谷の流域内には小規模ながら谷底を埋積した火砕流堆積物が認められる。この堆積物は平野縁辺部に断片的に分布し、火砕物中の炭化した樹幹の年代測定では37,000年以上の数値が得られている(山口, 1993)。

轡(2)遺跡は岩木山北東麓の十面沢南西方約1km地点に位置する。長前川東方を蛇行しながら北流する浸食谷沿いに立地する。下流部の台地縁辺部には小戸六溜池が築造され、長前川とともにこれに注いでいる。轡(2)遺跡の調査区域は標高約110~112mの岩屑なだれ堆積物からなる丘陵地に立地し、周辺には伝次森山・御月山など典型的な十面沢円頂丘群に相当する円錐丘が林立していて多島海の様相を呈している。遺跡周辺は浸食により起伏に富む谷間丘陵地であるが、調査区域はちょうど平頂部にあたりりんご園として土地利用されている。なお、十面沢集落はこの浸食谷による円錐丘の浸食された裾野部分に点在している。

次に、轡(2)遺跡の基本層序は調査区域のうちO-53グリッド及びP-42グリッドにおける土層区分を基に記述する。図6には本遺跡周辺における土層の模式柱状図を、図7には調査区域内のセクションを表したが、調査区域全体がりんご園造成のために削平され基本層序の第IV層上部まで攪乱を受けている。このため、遺跡周辺における土層区分を補足した上で本調査区域の基本層序を確立した。

I層 暗褐色土 10YR3/4 厚さ20~30cm。

耕作土である。粘性・湿性がややあり、かたさがあるが締まりにやや欠け全体的にソフトな感じがする。耕作により下位の第IV層まで攪乱され混合土となっている。ローム粒及び軽石粒などの混入が多くみられる。

II層 黒色腐植質土 10YR2/1 厚さ10~30cm。

腐植質で粘性・湿性が十分である。

III層 黒色粘質土 10YR1.7/1 厚さ約10cm。

粘性・湿性が十分である。ローム粒及び軽石粒などの混入が少なく、乾くとソフトな感じがする。

IV層 暗褐色土 10YR3/4 厚さ10～30cm。

漸移層で、粘性・湿性があり、かたく締まる。2層に細分され、下部のIV b層ほどロームブロック及び軽石粒の混入が多く、明るい色調を呈する。

V層 黄褐色ラピリ質軽石層 10YR5/6 厚さ30～50cm。

緻密堅固な細粒軽石層で、層相から2層に細分される。上部のV a層は、径5～30mm大の軽石粒が多量の混入し、下部のV b層はラピリが目立つ。本層は上部火山灰層に相当し、低位段丘面及び新期山麓扇状地を構成する火山灰層の指標となる。

VI層 明黄褐色ローム層 10YR6/6 厚さ10～20cm。

緻密堅固な粘土質ローム層で、クラックの発達がみられ暗色帯の特徴を有する。

VII層 黄褐色ローム層 10YR5/4～10YR5/8 厚さ80～100cm。

緻密堅固な粘土質ローム層である。下位には、褐色粘土質ローム層(7.5YR4/4～7.5YR4/6)が100cm以上堆積し、ローム層中には薄層の黄灰色粘土質ロームが波打つように2～3枚堆積する。本層以下のローム層は中部火山灰層に相当する。中部火山灰層上半部は粘土質ローム層が主体でローム層直下には洞爺火山灰に比定される白色細粒軽石層が薄く堆積する。また、下半部はラピリ質軽石層と緑灰色ローム層との互層が主体を成している。洞爺火山灰層より上位のローム層は中位段丘及び古期の山麓扇状地を構成し、下半部の軽石層を含む中部火山灰層全体を堆積するのは岩屑雪崩による丘陵地である。

参考・引用文献

- 大沢 穠 1961 5万分の1地質図幅「弘前」(青森-第28号)同説明書 地質調査所
一色直記・大沢 穠 1967 岩木火山北東麓の泥流丘群 火山 Vol. 2 No.12-3
中川久夫 1972 青森県の第四系 青森県の地質 第二部 青森県
鈴木隆介 1972 岩木山の変位 地理学評論45号
山口義伸 1993 平川流域での十和田火山起源の浮石流凝灰岩について
年報 市史ひろさき No.2 弘前市

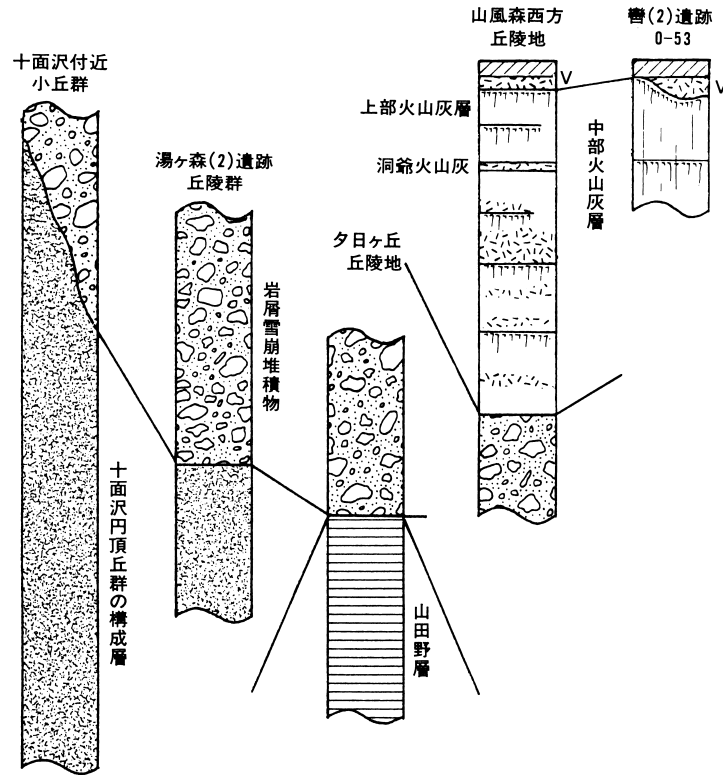


図6 遺跡内及び周辺の火山灰層等の模式柱状図

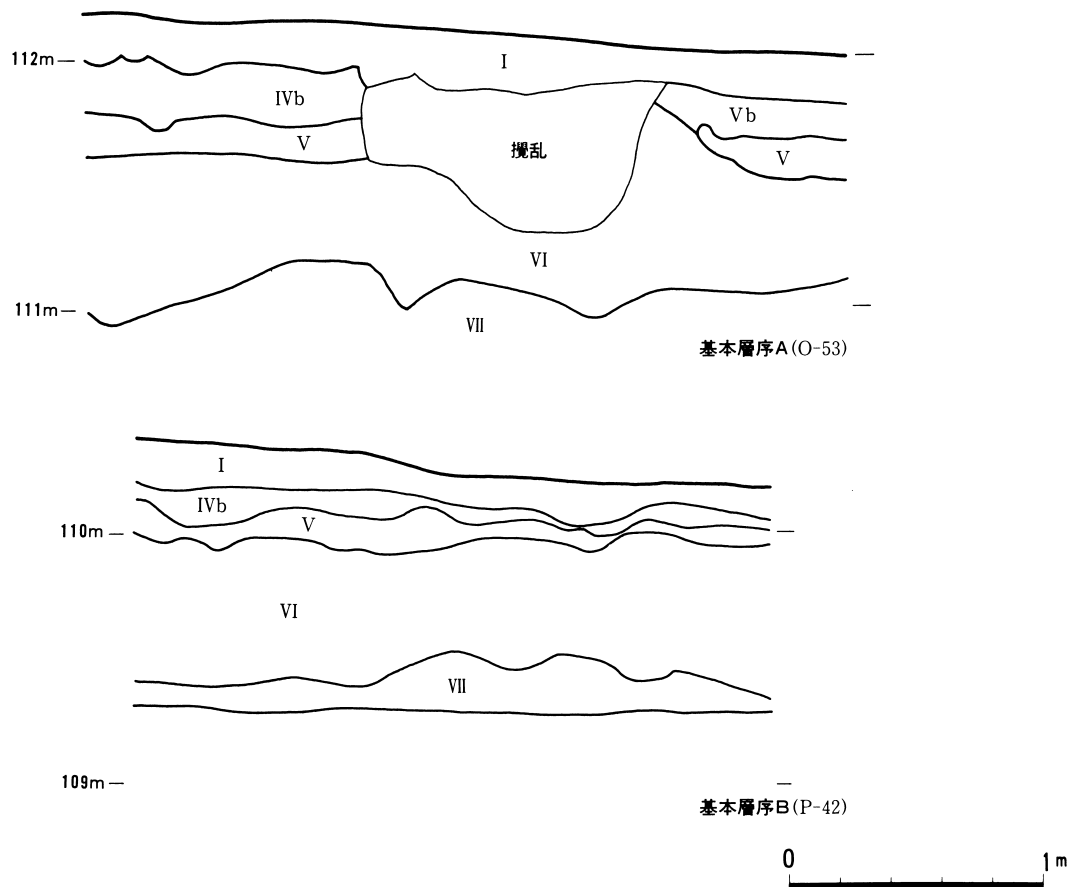


図7 基本層序

第3章 出土遺物

本遺跡は、りんご畑の造成に伴い削平及び盛土が行われており、今回の調査区内において遺構は検出されなかった。また、出土した遺物も少なく、土器は全て破片で9点、石器は不定形石器6点が出土した。

1 土 器

出土した土器は、破片で9点である。そのうち1～6は同一個体と考えられるので、別個体4個が出土したことになる。しかし、断面が擦り減って丸みを帯びるほど磨耗が激しい資料ばかりである。これらは、縄文時代晩期～弥生時代の土器片と思われる。

1～6は、同一個体と思われる、1は口縁部、それ以外は全て胴部破片である。口縁は外反し、口唇部には刻みを施し、口頸部下半から山形状に幅3mm程の沈線を施している。焼成は良好で、堆土には砂粒の混入が目立つ。

7は、胴部破片で、縄文を施している。磨耗のため、縄文の撚り方向などは不明である。外面にすずが付着している。焼成は良好で、堆土には砂粒の混入が目立つ。出土土器の中では比較的厚い。

8は、波状口縁と思われる口縁部で、直径8mm・深さ3mm程の貫通しかけたような穴が認められる。口唇部には、縄文の圧痕を施しているようだ。

9は、胴部破片で、縄文を施している。焼成は良好で、堆土には砂粒の混入が目立つ。弥生時代の土器片と思われる。

(山内 実)

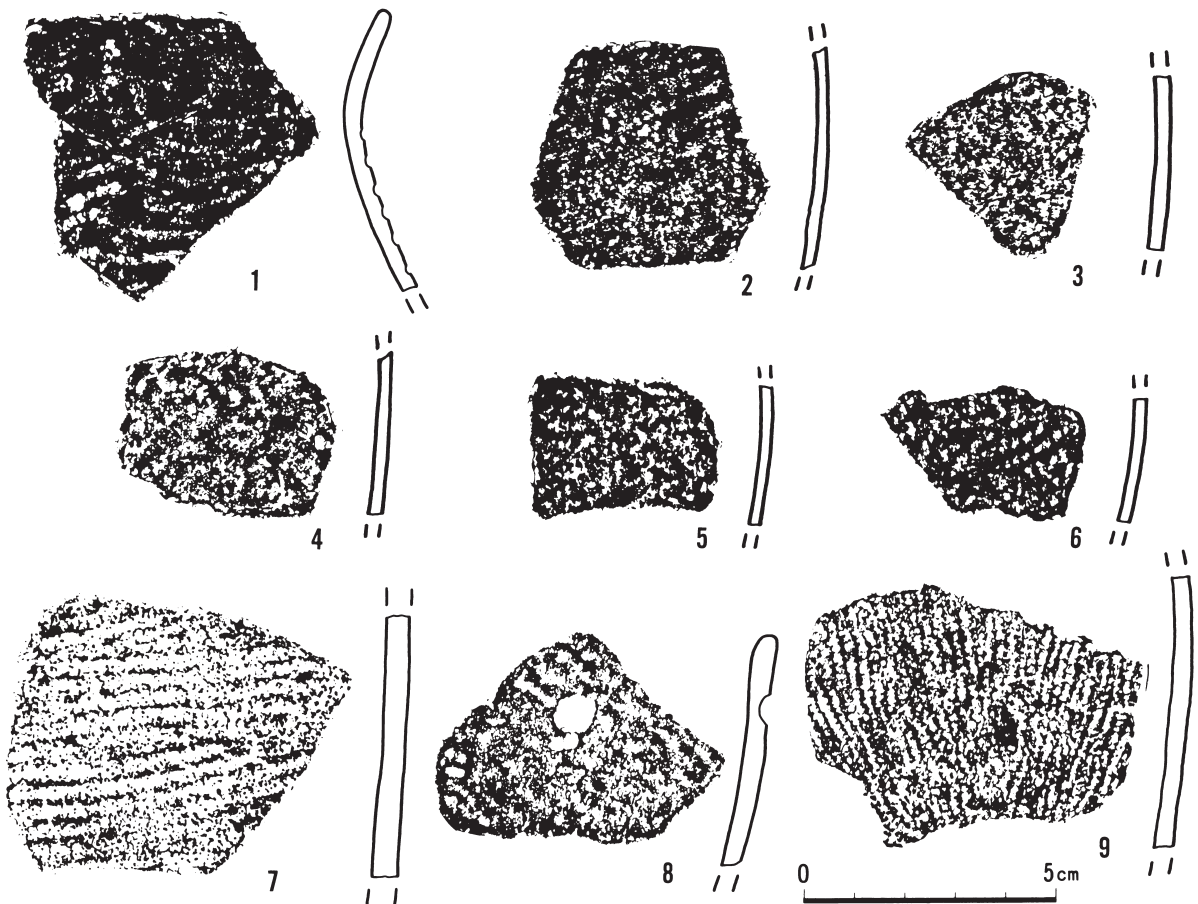


図8 出土土器

2 石 器

6点の出土で、すべて剥片素材の不定形石器である。出土地点は、1点を除いてQ-17グリッドに集中している。

- 1 縦長剥片の片側縁に、連続した微細剥離が認められる。先端部が欠損しており、この折損部から2 mm程上部に亀裂が認められることから、錐的な使用をした可能性が考えられる。
- 2 縦長剥片の両側縁に、片面から連続した剥離を加え、尖頭部を作出していることから石錐または石鏃の可能性が考えられる。背面には欠損の痕跡が認められないが、器端（バルブ）部が破損していることから未製品または欠損品とも考えられる。
- 3 縦長剥片を素材とし、片側縁に連続した刃部調整が認められ、磨滅が認められる。他側縁には長い微細剥離が認められる。
- 4 横型剥片の一部に連続した剥離がなされており、この縁辺に油脂光沢が認められる。
- 5 縦長剥片に横位からの剥離が認められる。フレイクコアまたは欠損品と考えられる。
- 6 薄い剥片に剥離痕が数方向から認められるが、大きな破損面のあることから、整形途中の破損破片と考えられる。

これらの石質素材はすべて珪質頁岩である。

このほかに剥片及び礫が数点出土したが、使用痕跡は認められなかった。

(白鳥 文雄)

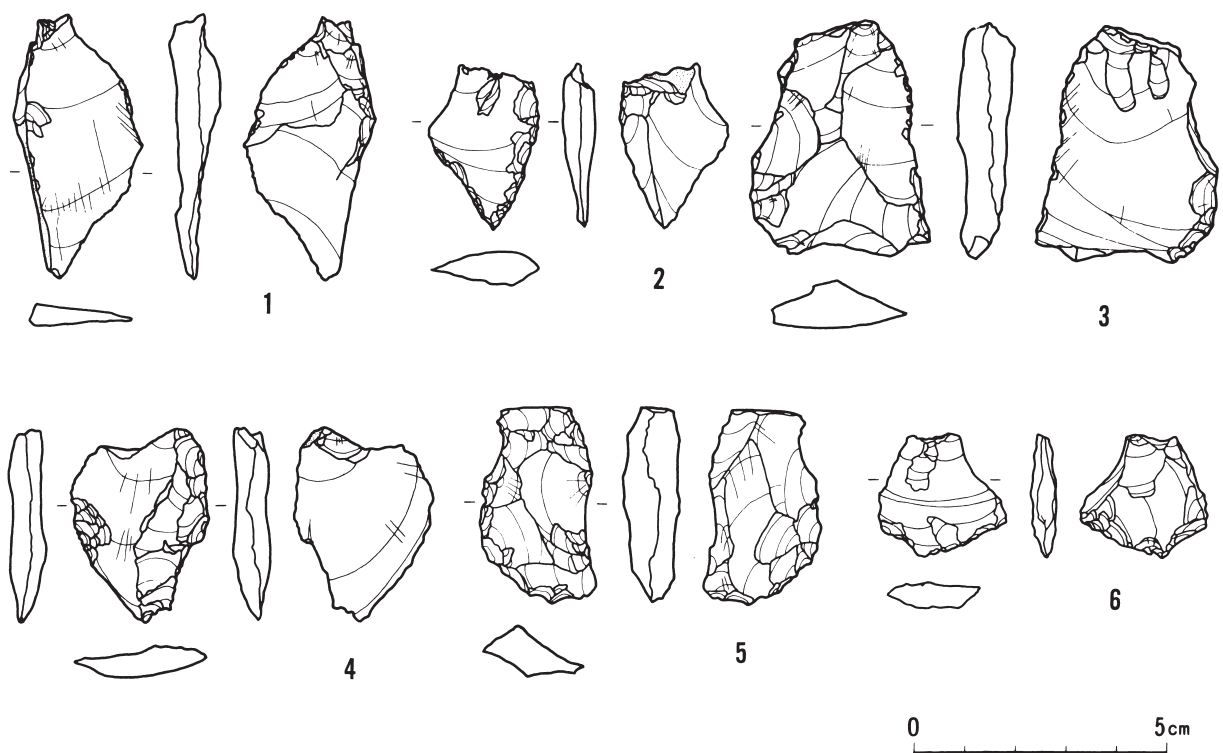


図9 出土石器

表 2 土器観察表

図版番号	出土位置	層位	部位	文 様 構 成	時 期	備 考
図 8 - 1	Q - 20	表採	口縁	口頸部下半に山形状沈線文数段施文	縄文晩期	
- 2	"	"	胴部		"	1 と同一個体
- 3	"	"	"		"	"
- 4	"	"	"		"	"
- 5	"	"	"		"	"
- 6	"	"	"		"	"
- 7	L - 45	"	"	縄文施文, 外面にすず付着	"	
- 8	Q - 17	"	口縁	波状口縁の一部? 未貫通孔?	"	
- 9	Q - 20	"	胴部	縄文施文	弥生?	

表 3 石器計測表

図版番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石 質	器 種	備考
図 9 - 1	Q - 22	表採	52.0	25.5	10.0	7.0	珪質頁岩	不定形	
- 2	Q - 17	"	32.0	21.5	6.5	3.1	"	"	
- 3	"	"	46.5	36.0	9.5	14.8	"	"	
- 4	"	"	38.0	27.0	7.0	6.1	"	"	
- 5	"	"	38.5	23.0	11.5	9.4	"	"	
- 6	"	"	24.5	25.0	5.0	2.8	"	"	

第4章 まとめ

本遺跡は、弘前市の北方にある標高約40mの岩木山麓の扇状地上に位置している。

本遺跡は、昭和63年度の県教育委員会（教育庁文化課）による遺跡分布調査により新規に登録された遺跡である。当時、この轡地区（弘前市大字十面沢字轡）は、(1)～(8)遺跡が登録されたが、現在は、轡(12)遺跡まで追加登録されている。

今回の発掘調査は、主要地方道弘前・鮭ヶ沢線の十面沢から岩木山環状線に至る農道整備事業（拡張工事）に伴うもので、調査期間2週間であった。

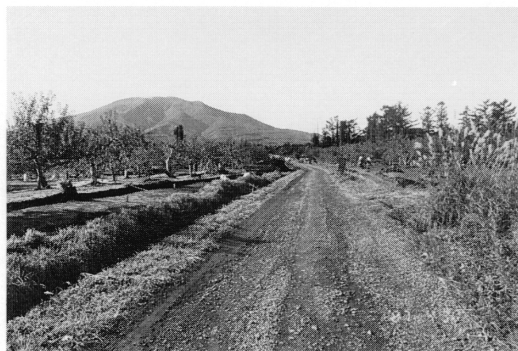
本遺跡の周辺には、約4km東に砂沢遺跡、約3km南南東に大森勝山遺跡、約1.8km北西に十腰内遺跡などが位置する。（図2参照）

調査区は、農業用道路の両脇1～2m幅で約3.2kmに及ぶ範囲であった。

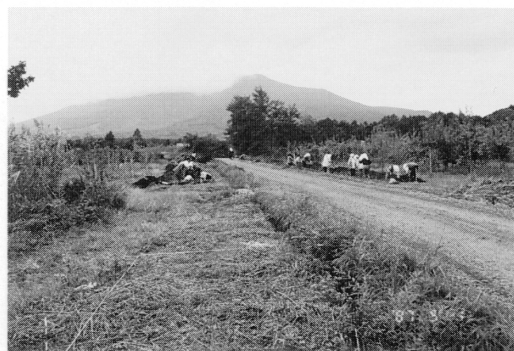
調査の結果、調査区域内はりんご園造成による削平と農道建設工事による攪乱を受けており、遺構等は全く検出されなかった。遺物は、縄文土器片（主に晩期）9個と不定形石器6点が出土した。

本遺跡は、農地整備による削平を受けたため、遺構等は残っていないようである。また、遺物は縄文時代の土器片等が出土したが、磨耗が激しいことから、周辺から流れ込んできた可能性も考えられる。

（山内 実）



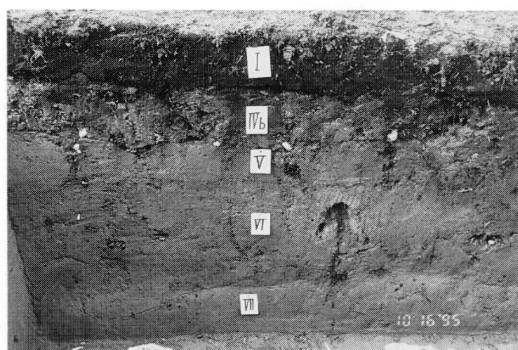
遠景(北から)



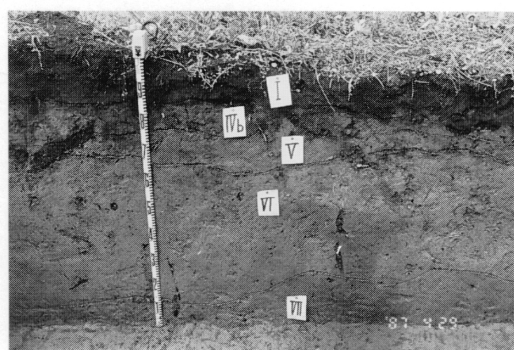
近景(北から)



作業風景



基本層序(O-53)



基本層序(P-42)

写真1



粗掘り終了(Q-13~25)



粗掘り終了(Q-25付近)



粗掘り終了(表土が薄い状況)

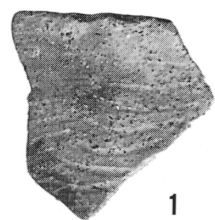


調査終了(O-60付近)

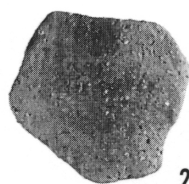


粗掘り終了(Q-26付近)

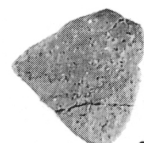
写真 2



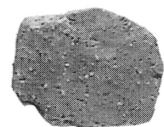
1



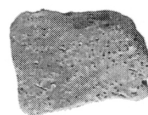
2



3



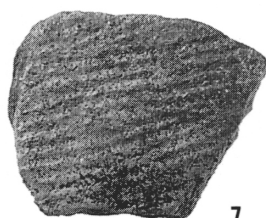
4



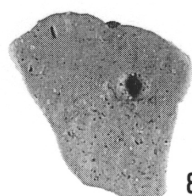
5



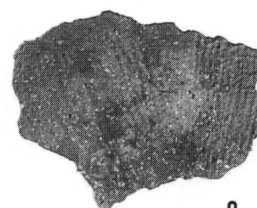
6



7

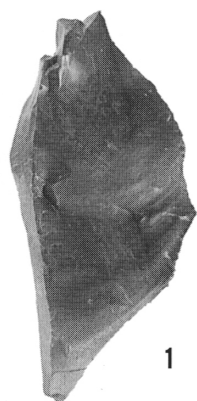


8



9

土器 (S=1/2)



1



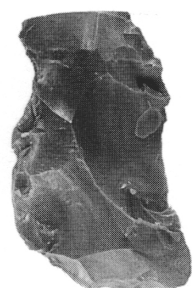
2



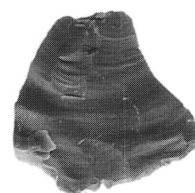
3



4



5



6

石器 (S=1/1)

写真3 出土遺物

報告書抄録

ふりがな		くつわ 2 いせき						
書名		轡 (2) 遺 跡						
副書名		県営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う遺跡発掘調査報告						
巻次								
シリーズ名		青森県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号		第218集						
編著者名		白鳥文雄・下山信昭・山内 実						
編集機関		青森県埋蔵文化財調査センター						
所在地		〒038 青森市大字新城字天田内152-15 TEL0177 (88) 5701						
発行年月日		西暦1997年 3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くつわ 轡 (2)	あおもりけんひろしまし おおあざ 青森県弘前市大字 とつらまわあざくつわ 十面沢字轡 47-2 ほか	02202	02188	40° 43' 17"	140° 20' 51"	19951011 ～ 19951024	1,000	県営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
轡 (2)		縄 文			縄文土器・石器			

青森県埋蔵文化財発掘調査報告書 第218集

轡 (2) 遺 跡

—— 県営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う遺跡発掘調査報告 ——

発行年月日 平成9年3月31日
発 行 青森県教育委員会
〒030 青森市新町二丁目3-1
編 集 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038 青森市新城字天田内152番15
TEL (0177) 88-5701 FAX (0177) 88-5702
印 刷 所 ヨシダ印刷(株) 青森営業所
〒030-01 青森市卸町7番3号
TEL 0177-28-4433
